

東京の大学で方言教育を実践する

—記述研究の立場から—

白岩 広行（立正大学）

【標準日本語】

1. はじめに

日本国内の少数言語や方言は、若い世代で標準日本語へのシフトが進み、話者の高齢化が進むことで消滅の危機に瀕している。近年、多くの研究者が自らのフィールドで少数言語や方言の継承にむけた取り組みを試みているが、継承の機運を高めるのは容易なことではない。本発表では、発表者が個人的におこなった実践事例を示し、継承の実現にむけて発表者自身がどう貢献できるかについてご意見を頂戴したいと考える。

筆者の問題意識はふたつある。ひとつは方言使用のドメインを広げたいということ、もうひとつは東京でも方言教育を試行したいということである。本発表では後者の問題意識を軸にして東京の大学における方言教育の実践例を示すが、前者についても簡単にここでふれておく。

「若い人は方言が話せない」とよく言われるが、実際には話す能力があるにもかかわらず実用の機会がないという中若年層話者も多いのではないだろうか。つまり、**competence**（方言を使うための知識）ではなく **performance**（方言の実用）の場の問題ということである。発表者自身、福島県出身で福島のことばが母語のはずだが福島のことばを実用する機会に恵まれていない。

【福島県北部方言】

1. はじめに

日本じゅうの少数言語だとか方言だとかは、若い人らが標準日本語ばっかししゃべるようになってしまったから、じいちゃんばあちゃんしかしゃべんなくなっちゃって、このままじゃなくなっちゃまんだな。最近では、自分のフィールドで方言の継承活動やってみるつつう研究者もけっこういっけんと、みんなして方言使っていぐべっていう雰囲気作っていぐのは容易でねえ。今日は、俺が個人的にやってみたことしゃべってみたら、方言が次の世代に本当に伝わるために、俺はどうしたらいいかつつうことについて、いろんな考え聞かせてもらいてえ。

俺が考えてること、ふたつあんだ。ひとつは方言使う場所を増やしたいつつうこと、もうひとつは東京でも方言教育やってみてえつつうことだ。今日は、東京の大学で方言教育やってみたつつう話すけど、「方言使う場所増やす」って話も、最初に簡単にしておく。

いや、「若い人は方言しゃべらん」っていうけど、実際にはしゃべれっけどしゃべる場所がねえつつう若い人も多いんだんめか。つまり、**competence**（方言を使うための知識）はあっても **performance**（方言の実用）の場がねえつつうことだ。俺自身、福島出身で福島のことばが母語なのに、福島のことば使いたくても使う場所がねえんだよ。

そのような潜在的話者に対しては、方言に関する知識を教授することではなく、日常的な方言使用場面を増やす手立てが必要だろう。そして、現代社会では、SNS やメールなど文字によるコミュニケーションが（もしかすると口頭での会話より）盛んである。それをふまえ、発表者は自身の母方言である福島県北部方言の表記法を白岩（2018a）で考案し、エッセー風の文章ではあるが、白岩（2018b）や自身の個人 web サイトで実用を試みてきた。方言を文字で書くことが習慣化できれば、それは方言の使用場면을大きく増やすことになる。

特に、研究者自身が方言を使うことは重要である。木部（2018）は「隗より始めよ」として「研究者自身がまず危機言語の活性化の実践者にならなければ、子どもたちや若い人たちに地域の言語を使うように勧めても、説得力がないのである。」（p.49）と述べている。

このような考えに立ち、自らが方言使用のドメインを広げる実践者になるため、本発表の資料は標準日本語と福島県北部方言の2言語仕様で作成した。方言が研究発表という公的な場でも使用できることばなのか、試してみたいと考える。発表自体を実践の一事例にすることをお許しいただきたい。これは研究者にしかできない仕事である。

2. 東京で実践する意義

発表者は、自らの母方言であり研究対象でもある福島県北部方言の授業実践を、自身の勤務する立正大学の授業科目としておこなった。立正大学は東京都内の私立大学であり、受講生もほとんどが首都圏出身者である。まずは、東京の大学で実践をおこなった理由をふたつの点から説明する。

そういう潜在的な話者には、方言の知識を教えるんでなくて、日常的に方言を使う場面を増やすことのほうが大事だと思う。あと、今の世の中では、SNS だのメールだの、文字でやりとりすることが（ひょっとすると口でしゃべるより）多いべした。そういうこと考えて、俺、自分の母語の福島の方言について、文字で書く方法を白岩（2018a）で考えたんだ。で、エッセー風の文章なんだけど、白岩（2018b）とか自分の個人 web サイトで実際に使ってみたんだよ。方言を文字で書く習慣ができれば、方言使う場面がうんと増えることになっと思うんだよな。

特に、研究者自身が方言使うつつうのは大事なことだ。木部（2018）は「隗より始めよ」つつって「研究者自身がまず危機言語の活性化の実践者にならなければ、子どもたちや若い人たちに地域の言語を使うように勧めても、説得力がないのである。」（p.49）って書いてる。

俺も、自分が方言使うドメインを広げてみてえと思ったから、この発表の資料、標準日本語と福島方言のふたつのことばで書いてみた。研究発表つつう公的な場面でも方言が使えるもんだか試してみてえんだ。この発表自体が実験みてえになっちまあけど、許してほしい。これ、研究者にしかできねえ仕事だと思うから。

2. なんで東京でやってみたか

俺にとっては、福島県北部のことばが自分の母語であって、研究対象でもあるんだ。んだから、福島の方言の授業実践を、自分のいる立正大学の授業科目として試してみた。立正大学は東京都内にある私立大学で、来てる学生もほとんど首都圏出身だけど、やる意味はあると思ったんだ。なんで東京でそういう実践やってみたかっていう理由、ふたつにわけて説明すっぺ。

そのひとつめの理由は、方言継承の機運を高めるには、活動が特定の地域に限られたものでなく、全国的な広がりを持つようになったほうがよいと考えたことである。現代社会において、特定の町でだけ方言が継承されるということは考えにくい。東京を含めて全国的に方言継承に対する理解が進まなければ、方言を実用するという社会的な流れは生まれないのではないだろうか。

そこで発表者は、方言教育の実践を東京の大学生にむけておこなった場合、どのような反応が得られるかを試したいと考えた。ほとんどの学生にとって福島県北部方言はなじみのないことばだが、英語や第二外国語の学習のように、方言学習にも興味を持つ人が東京に増えれば、それは全国各地の方言継承活動を後押しすることにもなるのではないか。例えば、「東京の学生も楽しく福島方言を勉強している」ということが福島に伝われば、それは福島における継承活動へのモチベーションを上げるだろう。端的に言えば、発表者は「東京が変われば地方も変わる」と考えた。

もうひとつの理由は、自らの勤務する大学が実践の場としてもっとも使いやすいという現実的なものである。地域で継承活動を進めるには、フィールドに何度も足を運んで多くの人と連携する必要があるが、遠隔地の大学に勤務する研究者にとって、それは大きな労力を要する。それよりは、まず日常の教育業務の一環として自分の担当科目のなかで方言教育を試行し、教材開発をおこなったほうが合理的だと考えた。そのうえで、そこから得た経験や教材をより地域に近い実践者と共有できれば、より効果的に継承活動を推進してゆけると考えた。

加えていえば、方言研究に関する大学での自分の授業が「面白いトピックのつまみぐい」だったことへの反省もある。これは近年の記述研究の潮流でもあるが、言語は体系として存在するものだから、特定の文法現象だけ恣意的に扱うのではなく、ひとつの方言の体系全体を基本から講ずる授業があつてよいと考えた。

ひとつめの理由は、みんなして方言使うべつていう雰囲気作っていぐには、どっか特定の地域だけでなく全国的に活動の輪が広がったほうがいいと思ったんだ。今の世の中、ある町でだけ方言がずっと使われ続けるなんつうこと、ありえねえと思うんだ。東京含めて、全国的に方言使うのは楽しいっつう人が増えていがねえと、実際に方言使うべつう流れは世の中さ広まんねんでねえかな。

そんじ俺は、方言教育の実践を東京の大学生にむけてやってみっと、どういうことになっかなって思ったわけだ。ほとんどの学生にとって福島の方言なんて聞いたこともねえことばだけんと、英語とか第二外国語みてえに、方言の勉強おもしろいって人が東京に増えたら、全国の継承活動にもプラスになっと思うんだ。例えば、「東京の学生だって楽しく福島のことば勉強してんだぞ」って福島の人に言ったら、「よし、俺らももっと方言しゃべってみっぺ」っつう人、増えんでねえかな。ひとことでいうと、俺、「東京が変わっつと地方も変わる」って考えたんだよ。

もうひとつの理由は、自分のいる大学の授業が実践の場としていちばんやりやすいつつ現実的な事情だ。福島で継承活動やるとすつと、なんべんも福島さ行って、いろんな人と連携する必要がある。俺、東京の大学さ勤めてて、そいつがなかなか難しいんだよ。それよりは、まず毎日やってる授業のなかで方言教育やってみて、教材作ったり経験つんだほうがいいんでねえかと思ったんだ。そして、そんときの話だとか教材だとか、福島にいる仲間と一緒に共有できたら、もっと効率よく継承活動進めていがれんでねえかと思った。

あと、俺の大学での方言研究の授業、これまで「面白いトピックのつまみぐい」だったんだよ。それだけじゃよくねえ。最近の記述研究でも言われてっけど、言語は体系なんだから、面白そうな文法現象だけ我がの都合で取り出すんでねくて、ひとつの方言の体系まるごと見てみるっつう授業があつたほうがいいと思った。

発表者は、以上のような目的意識から、2018 年度後期の立正大学文学部の授業科目「現代言語科学 2」を方言学習の実践をおこなう授業として実施した。シラバスは別添資料のとおりである。

この授業では、福島県北部方言のほか沖縄本島中南部方言もあつかった。これは、日本の少数言語・方言の多様性を知るために沖縄のことばが重要であること、発表者の所属する立正大学文学部文学科には琉球文学のゼミがあつて琉球語学習に対する一定の需要があることによる。ただし、本発表では福島県北部方言に関することを中心に話を進めることとする。

3. 授業実践のための言語計画

一般に、言語使用のありかたを定めるには、どのことばを使用するか「席次計画」、そのことばの実質を整える「実体計画」、どのように普及活動を進めるか「普及計画」の3つからなる言語計画が必要である。発表者の授業実践は小さな活動ではあるが、実践を進めるにあたってそれぞれ次のような計画を立てた。

まず席次計画についてだが、授業時の教授言語としてはなるべく福島県北部方言を使うことにした。ただし、主に首都圏出身者が受講生であるため、実際には、語彙・文法面でかなり標準日本語に近い言語使用になった。

実体計画としては「福島県北部方言」の具体的な中身を決めねばならない。同じ方言にも細かな個人差はあるが、この授業では発表者自身およびその家族が使うことばを基準とすることにした。そのうえで、細かな地域差や世代差、個人差があることに言及し、どれが「正しい福島方言」というわけでもないこと、むしろ違いを楽しむ姿勢が重要であることを説明した。

俺、そういうわけで、2018 年度後期の「現代言語科学 2」つつう何やってもよさそうな授業科目で、方言学習の実践やってみたんだよ。別の資料さシラバスのつけておいたから見てほしい。

この授業では、福島の方言のほかには沖縄本島中南部方言も教えてみた。やっぱし日本のことばの多様性を知るためには沖縄のことばが必要だし、うちの大学の文学科には琉球文学のゼミがあつて琉球語やってみる甲斐もあつたからなんだ。ほだけんと、とりあえず今日の発表では福島のことに関するを中心に話を進めていく。

3. 授業するための言語計画

普通、ことばをどんなふうに使っていくか決めんには、どのことば使うかつつう「席次計画」、そのことばの中身を整える「実体計画」、どうやってそのことばを広めつかの「普及計画」っていう3つの計画をまとめた言語計画が必要だべ。俺の授業実践はほんのささやかな活動だけんと、言語計画についてはこんなふう考えた。

まず席次計画だけんと、授業すつときはなるべく福島の方言使うことにした。ただ、首都圏の学生が相手だから、実際にしゃべってみつと、語彙とか文法の面で標準日本語に近くなつちまつた。

実体計画では「福島県北部方言」の中身を具体的に決めねつかなんねえ。同じ方言だって細かな個人差はあつけど、この授業では俺とか俺の家族が使つてることばを基準にすることにした。そしてから、細かな地域差とか世代差とか個人差はあるんだつてこと、どれが「正しい福島方言」つつうわけでもないねえつてこと、違いがあつたら違いを楽しんだほうがおもしろいべつてこと、ちゃんと説明するようにした。

また、白岩（2018a）で示した表記法をもとに別添資料のような五十音図を作って福島県北部方言の音と表記を整理した。日常的な使用を目指した漢字かなまじり式、形態音韻規則や活用の理解などに必要なアルファベット式の 2 とおりの表記を考案した。

伝統的な福島県北部方言は、いわゆるズーズー弁であり、標準日本語の「い／え」「し／す」「ち／つ」「じ／ず」にあたる音が区別なく発音される。アルファベット式ではこれらの音を e、su、cu、zu と区別なく表記することにした。一方、漢字かなまじり式では標準日本語に準じて区別することにした。これは、現在の福島県北部方言話者にはほとんど標準日本語のリテラシーがあり、それに準じて区別したほうが読み書きしやすいこと、また、多くの話者は実際に発音し分けていることによる。

また、福島県北部方言には、母音間の k 音、t 音が有声化するという特徴がある。しかし、有声化の有無には揺れもあるため（発表者の観察や飯豊 1974、幡 2004 の記述より）音声的な変異と見なし、漢字かなまじり式でもアルファベット式でも、それを濁音や有声子音 g、d で表記することはしない。

普及計画に属することとして、教材の作成をおこなった。この授業のために作った教科書の一部として、子音（か行、が行、さ行）、形態音韻規則 ret→ccy、主語・目的語の標示に関する箇所を抜粋して別添資料に示す。この教科書は白水社の『ニューエクスプレス〇〇語』シリーズなどの語学教科書を参考に作ったもので、会話例、文法概説、練習問題などから成る。解説は標準日本語で書いてある。福島県北部方言の例文は上述の表記法で表記した。

あと、白岩（2018a）で考えた表記法もとにして五十音図を作って、音と文字の整理してみた。五十音図も、別の資料さのつけておいた。普段の生活で使いやすい漢字かなまじり式と、形態音韻規則とか活用とかの解説に使うアルファベット式と、2 とおり表記法を考えた。

昔ながらの福島の方言は、いわゆるズーズー弁から、標準日本語の「い／え」「し／す」「ち／つ」「じ／ず」にあたる音の区別がねえ。アルファベット式では、そういう音を e、su、cu、zu って区別しねえで書くことにした。でも、漢字かなまじり式では、標準日本語と同じように区別することにした。だって、今の福島の人にはほとんど標準日本語で読み書きすつから、「し」と「す」を区別しねえで全部「す」って書いたら読みにくくってしょうねえ。それに、今の福島の人はたいがいみんな「し」と「す」、発音しわけてっから。

あと、福島の方言では、母音に挟まれた k と t の音が有声化する。んだけんと、実際には有声化すつかどうかには揺れもあんだ（俺の観察とか飯豊 1974、幡 2004 の内容から）。んだから、有声化は音声的な変異だと考えて表記には反映させねえことにした。濁音で書いたり g とか d で書いたりはしねえ。

普及計画については、教材作ってみた。別紙の資料見てほしい。授業のために作った教科書の一部で、子音（か行、が行、さ行）、形態音韻規則 ret→ccy、主語・目的語の標示についての内容だ。白水社の『ニューエクスプレスなんとか語』っていう語学教科書のシリーズあっぺした。ああいうがな参考にして作ったんだ。会話の例、文法の解説、練習問題とかいった内容だな。解説は標準日本語で書いた。方言の例文は上で説明した表記法で書いた。

また、中学校の英語の授業のように、福島県北部方言の語句を書いた画用紙を用意し、授業内に「リピート・アフター・ミー」の掛け声で授業者に続いて学生が一斉に復唱する反復練習をおこなった。

以上、授業にあたって計画したことを、席次計画、実体計画、普及計画の3つに分けて説明した。

4. 受講生の反応

授業の内容は、前節および別添資料に示すとおりである。本節では受講生の反応についてまとめる。

まず、この授業をとおして受講生がどの程度方言を習得したか示す。この授業は木曜1限の開講科目で37名の履修登録があった。履修者は全員が立正大学文学部文学科日本語日本文学専攻コースの学生で、1年生が28名、2年生が5名、3年生が2名、4年生が2名であった。朝9:00開始の1限目の科目ということもあり、4名の学生が最初の数回までで脱落したが、残り33名は継続的に出席して期末テストを受験した。

期末テストは別添資料のとおりである。期末テストは50点満点で、平均35.1点、中央値36点、最高点45点、最低点21点であった。福島県北部方言と沖縄本島中南部方言の問題が混じるが、このような問題を7割程度正解できる程度に習得が進んだということになる。

次に学生の意見や感想を示す。この授業では、次の3回にわたって学生の感想や意見を求めるアンケートをおこなった。

- ・アンケート①：方言の学習で難しかった点について（第11回、11月29日の授業時、記名式）
- ・アンケート②：授業全体の感想（全学で統一的に実施する授業改善アンケート、第13回、12月20日の授業時、匿名式）

あと、中学校の英語の授業みてえに、福島のことば書いた画用紙作った。授業中に「リピート・アフター・ミー」って掛け声かけて、学生に一斉に復唱させる反復練習したんだ。

俺、そういう感じで席次計画、実態計画、普及計画の3つごとに計画立てたわけだ。

4. 学生からの手応え

授業の内容はここまで書いたことと別紙の資料のとおりだ。次に学生の反応について書く。

まず、この授業で学生がどなくらい方言身につけたかだ。この授業、木曜1限の授業で37人が履修登録した。みんな立正大学文学部文学科日本語日本文学専攻コースの学生で、1年生が28人、2年生が5人、3年生が2人、4年生が2人いた。朝9時に始まるっつうこともあって4人が最初の何回かで脱落したけど、残りの33人は期末テストまでついてきてくっちゃ。

期末テストも別の資料さのつけておいた。50点満点で、平均が35.1点、中央値が36点、最高点が45点、最低点が21点だった。福島と沖縄の両方の問題まざってっけんと、こだ感じの問題、7割くらいは正解できるようになったわけだ。

次に学生の感想だ。この授業では下にしたみてえに3回アンケートとった。

- ・アンケート①：方言の学習で難しかった点について（第11回、11月29日の授業時、記名式）
- ・アンケート②：授業全体の感想（全学で統一的に実施する授業改善アンケート、第13回、12月20日の授業時、匿名式）

・アンケート③: この授業は自分にとって意義があったか (第 14 回、1 月 10 日の授業時、記名式)
このうち③のアンケートで得られた全回答を別添資料に示す。

もともと興味を持つ学生が履修したということもあるが、資料に示すとおり、方言継承の社会的な意義はさておき、自分が方言学習をしたこと自体は楽しかったと評価するものが多かった。

実際に方言教育を実践するとき、重要なのは継承活動の社会的意義を理解してもらうことより、学習者の個人個人に「楽しかった」と思ってもらうことであるから、その点で一定の成果があったものと考えたい。このような意識を持つ若い世代が全国的に増えれば方言継承に向けた機運が高まることになるのではないだろうか。

なお、記名式のほうが充実した回答が得られたためアンケート③の結果を示したが、匿名式のアンケート②でも授業への好意的な評価が寄せられた。

5. 研究者としての反省点

この実践では、授業者として学生から一定の好意的な評価を得た一方で、研究者として反省すべき点も強く感じた。最後にそれをまとめて今後の課題としたい。

反省点は、端的にいうと「記述研究の蓄積が十分でない」ということである。

例えば、別添資料の教科書の抜粋では、福島県北部方言で格助詞「が」「を」の使用が非常に少ないことを解説している。しかし、白岩編 (2017) 所収の談話資料を見る限り、「を」の使用は極度にまれであるものの、「が」の使用は一定数見られる。談話の概観や発表者の内省の限りでは、下地 (2019) のいう「脱主題化仮説」が関係しているように感じられるが、どのようなときに「が」が使われるかは明確でない。

・アンケート③: この授業は自分にとって意義があったか (第 14 回、1 月 10 日の授業時、記名式)
このうち③のアンケートで学生が書いてくっちゃ回答全部、別紙の資料にのっけておいた。

もともと好きで履修した学生らではあんだけんと、方言継承の社会的な意義はともかく、自分が方言勉強したことは楽しかったっつうコメントが多かった。

実際に方言教育やっとなんと、大事なのは「社会的に意義深い」って思ってもらうことより、「俺、方言勉強しておもしろかった」って思ってもらうことだべ。その意味では、いい反応もらえたと思う。こう思ってくれる若い人らが全国的に増えんと、世の中の雰囲気も変わってくんであめめか。

ちなみに、記名式のほうが張り切って書いた学生が多かったからアンケート③の結果見せたけんと、匿名式のアンケート②でも回答は好意的だった。

5. 研究者として反省したこと

授業やっとなんと、学生からはある程度いい反応あったわけけんと、研究者としてはうんと反省しねえかなんねえことがあった。これからのために、そのこと最後に書くべ。

反省したのは、ひとことという「記述がまだまだ足んにい」っつうことだ。

例えば、別の資料にのつけた教科書の抜粋では、福島の方言で格助詞の「が」「を」をほとんど使あねえって解説した。んだけんと、俺が作った談話資料見てみんと、「を」は確かにほとんど使あねえんだけんと、「が」はある程度使うんだよな。ざっと談話見たり俺が内省した感じでは、下地 (2019) のいう「脱主題化仮説」が効いてんでねえかって思うんだけど、まあ、いつ「が」を使うかつつのは、今んとこ、わかんねえ。

これは「『が』は主格助詞である」とか「『が』は主語を表す」といった従来の説明で解決する問題ではない。主語・目的語の標示は、文法記述の面でも言語学習の面でも、かなり基本的な事項であるはずだ。

発表者は、別添した教科書で

なお、「を」は基本的にほとんど使いませんが、「が」を使うことはときどきあります。「が」を使う場合については、後の単元で説明します。

と書いてごまかしたが、その「後の単元」は今後の研究を進めないと書くことができない。そして、それは間違いなく研究者のなすべき仕事である。

もちろんこれは「が」の問題だけではない。「悪い warue→わりい warii」のような随意的に見える形態音韻的变化がいつ生じるか、準体助詞「がな」と「の」の使い分け、終助詞の意味用法など、記述すべきことは言語体系の全体にわたる。

以上、本発表では、東京の大学における実践事例を紹介するとともに、教育のためにも記述研究の進展が不可欠であることを示した。

これって、「『が』は主格助詞である」だの「『が』は主語を表す」だの能書きたっちも説明になんねんだ。主語と目的語の標示だなんて、研究すんにも教育すんにも、かなり基本的なことだべ。それがわかんねえのは困りもんだ。

別紙の教科書見てほしい。俺、

なお、「を」は基本的にほとんど使いませんが、「が」を使うことはときどきあります。「が」を使う場合については、後の単元で説明します。

って書いてごまかしちまった。「後の単元」、これから研究進めねっか書かんにんだよな。これ、間違いなく研究者の仕事だよ。

もちろんこれは「が」だけの問題ではねえ。「悪い warue→わりい warii」みてえな語形の変化がいつ起こつかとか、準体助詞「がな」と「の」の使い分けとか、終助詞の意味用法とか、体系まるごと記述しねっかなんねえ。

そんなわけで、今日は俺が東京の大学で実践したことを紹介したけんと、教育のためにも記述研究が大事だってこと最後に言いてえと思った。

付記

本発表は下記の研究助成による成果の一部である。

- ・ 国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」
- ・ 日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）19H01255「日琉諸語の有標主格性に関する基礎的研究」、基盤研究（C）19K00622「福島県相双方言の調査研究—方言研究は被災地にどのように貢献できるか—」
- ・ 平成 31 年度立正大学人文科学研究所個人研究「継承活動にむけた方言記述研究の実践」

参考文献

飯豊毅一（1974）『言語使用の変遷（1）—福島県北部地域の面接調査—』国立国語研究所

木部暢子（2018）「消えゆく言語・方言を守るには」『國學院雑誌』119(11)

下地理則（2019）「現代日本共通語（口語）における主語の格標示と分裂自動詞性」竹内史郎・下地理則編『日本語の格標示と分裂自動詞性』くろしお出版

白岩広行（2018a）「福島方言の表記法を考える」『立正大学国語国文』56

———（2019b）「方言だから伝わることを考えて」『新しい地域文化研究の可能性を求めて』3、人間文化研究機構プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

白岩広行編（2017）『福島県伊達市方言談話資料 —震災後の生活と語り—』上越教育大学大学院学校教育研究科白岩研究室（科研報告書）

幡早夏（2004）「福島市方言における無声子音の有声化」『日本方言研究会第 79 回研究発表会発表原稿集』

別添資料：白岩広行「東京の大学で方言教育を実践する―記述研究の立場から―」

【授業シラバス】

■授業の目的

国内の少数言語・方言を継承する意義について考えたうえで、外国語を学習するときと同じような形で、国内の2つの方言の学習をおこなう。1つは授業者の母方言である日本語福島方言、もう1つは琉球語沖縄中南部方言（以下、「沖縄方言」）である。学習を通じて、日本列島の言語文化の多様性と豊かさを実感する。

■到達目標

- ・ことばを継承する意義について自分の考えを持つ。
- ・福島方言（日本語福島方言）を学習し、ことばの仕組みを理解する。
- ・沖縄方言（琉球語沖縄中南部方言）を学習し、ことばの仕組みを理解する。

■授業計画

【第1回】ガイダンス

【第2回】方言継承の意義を考える（1）東北方言

【第3回】方言継承の意義を考える（2）奄美方言

【第4回】福島方言 Lesson1：アエウエオ、サスセソ（母音）◆

【第5回】福島方言 Lesson2：オダカ° エサマダガラ（子音）

【第6回】福島方言 Lesson3：宿題忘っちゃえ、怒らっちゃ。（音変化規則）◆

【第7回】福島方言 Lesson4：俺、ばあちゃんさ、ままだおる買ってきた。（人称詞、格）

【第8回】福島方言 Lesson5：昨日はいたったけど、今日はいたかな。（時制）◆

【第9回】福島方言 Lesson6：雨やんだべ。どれ、行くべ。（モダリティ）

【第10回】沖縄方言 Lesson1：アイウイウ（母音）◆

【第11回】沖縄方言 Lesson2：「飲む」とヌムン、「高い」とタカサン（品詞）

【第12回】沖縄方言 Lesson3：ヌマン、ヌダン、ヌムン、ヌムル、ヌマビーン（活用）◆

【第13回】沖縄方言 Lesson4：ワンネー 東京ンカイ ウン（人称詞・格・とりたて）

【第14回】復習◆

【第15回】まとめ

◆の回に小テストをおこなう

英語や中国語などの外国語を学習するのと同じような形で、福島方言と沖縄方言を学習します。発音練習、単語の習得、文法事項の概説などをおこないます。授業回数が少ないので、流暢にしゃべれるようにはなりません。両方言の運用能力がちょっぴり身につくことを目指します。

英語や中国語にくらべて社会で実用する場面は限られますが、国内の多様なことばを学ぶことは、たいへん楽しく意義のあることだと思います。

■成績評価の方法

授業への取り組み姿勢 20%、小テスト 30%（5点×6回）、期末テスト 50%

福島語五十音図（白岩案）

「つぁ、ち、つ、つえ、つぉ」の子音は
ローマ字でcと書くことにします

ぱ pa	ば ba	だ da	ざ za	が ga	わ wa	ら ra	や ya	ま ma	は ha	な na	つぁ ca	た ta	さ sa	か ka	あ a
ぴ pi	び bi	ぢ zu	じ zu	ぎ gi		り ri		み mi	ひ hi	に ni	ち cu		し su	き ki	い e
ぷ pu	ぶ bu	づ zu	ず zu	ぐ gu		る ru	ゆ yu	む mu	ふ hu	ぬ nu	つ cu		す su	く ku	う u
ぺ pe	べ be	で de	ぜ ze	げ ge		れ re		め me	へ he	ね ne	つえ ce	て te	せ se	け ke	え e
ぽ po	ぼ bo	ど do	ぞ zo	ご go	ん N	ろ ro	よ yo	も mo	ほ ho	の no	つぉ co	と to	そ so	こ ko	お o

●上段は標準語に準じた「漢字かなまじり」の表記、下段は福島語の音声を反映した「ローマ字」の表記です。

●二重線で囲った「い・え」「し・す」「ち・つ」「じ・ず・ち・づ」は、伝統的な福島語では区別なく発音されますが、「漢字かなまじり」で表記するときは標準日本語にあわせませう。

ぴゃ pya	びゃ bya	じゃ zya	ぎゃ gya	りゃ rya	みゃ mya	ひゃ hya	にゃ nya	ちゃ cya	しゃ sya	きゃ kya
ぴゅ pyu	びゅ byu	じゅ zyu	ぎゅ gyu	りゅ ryu	みゅ myu	ひゅ hyu	にゅ nyu	ちゅ cyu	しゅ syu	きゅ kyu
		じえ zye					にえ nye	ちえ cye	しえ sye	
ぴょ pyo	びょ byo	じょ zyo	ぎょ gyo	りょ ryo	みょ myo	ひょ hyo	にょ nyo	ちょ cyo	しよ syo	きょ kyo

例) 鯉（こい）koe／声（こえ）koe、梨（なし）nasu／茄子（なす）nasu、町（まち）macu／松（まつ）macu、火事（かじ）kazu／数（かず）kazu

●母音に挟まれると、kの音は[g]、gの音は鼻にかかる[n]、tの音は有声音の[d]に変わりますが、この音変化は「漢字かなまじり」「ローマ字」のどちらの表記にも反映させません。 例) 柿（かき）kaki—発音は[kag i]、鍵（かぎ）kagi—発音は[kan i]、旗（はた）hata—発音は[hada]

4. 子音

福島語は標準日本語と同系統の言語なので、標準日本語の「行」という概念をもとに「か行」「が行」「さ行」「ざ行」……と順に整理しながら、子音の仕組みを説明します。かな表記、アルファベット表記と音声は先の「あ行」と同じように示します。2とおりの発音がある場合は「〜」の記号で2つの音声を併記します。

4.1 か行

か ka [ka ~ ga]、カ〜ガ
き ki [ki ~ gi]、キ〜ギ（ややク〜グに近い）
く ku [kü ~ gü]、ク〜グ（ややキ〜ギに近い）
け ke [ke ~ ge]、ケ〜ゲ
こ ko [ko ~ go]、コ〜ゴ

「か行」の子音は k で標準日本語とほぼ同じです。

例) 紙^{かみ}kami [kami] 米^{こめ}kome [kome] ♪CD=
ただし、母音に挟まれた k の音は [g] で発音されることが多いです。

例) 赤い^{あか}akae [agaɕ] たこ tako [tago] ♪CD=
母音に挟まれても、「鹿」suka [sütika] のように [k] のまま発音されたり、「聞く」kiku [kikü ~ kīgü] のように [k] と [g] の間で発音が揺れたりすることもあるので、必ず [g] で発音されるわけではありません。[g] で発音されることが多いとだけ覚えておきましょう。

4.2 が行

が ga [ga ~ ŋa]、ガ〜ンガ
ぎ gi [gi ~ ŋi]、ギ〜ンギ（ややグ〜グに近い）
ぐ gu [gü ~ ŋü]、グ〜ング（ややギ〜ンギに近い）
げ ge [ge ~ ŋe]、ゲ〜ンゲ
ご go [go ~ ŋo]、ゴ〜ンゴ

「が行」の子音は g で標準日本語とほぼ同じです。

例) ごみ gomi [gomi] ガス gasu [gasü] ♪CD=
ただし、母音に挟まれた g の音は鼻に抜ける [ŋ] で発音されます。この発音は、標準日本語で「鼻濁音」と呼ばれるものと同じです。母音間の k が [g] になる場合とちがって、発音の揺れはほぼありません。

例) かご kago [kaŋo] 鍵^{かぎ}kagi [kaŋi] ♪CD=

4.3 さ行

さ sa [sa]、サ
し・す su [sü]、ス（ややシに近い）
せ se [se]、セ
そ so [so]、ソ

「さ行」の子音は s で標準日本語とほぼ同じです。

例) 笹^{ささ}sasa [sasa] みそ^{みそ}miso [miso] ♪CD=
ただし、標準日本語の「し」と「す」にあたる音が区別なく su [sü] として発音されます。
例) 四^しsu [sü] 酢^すsu [sü] ♪CD=

5. 音変化規則 ret → ccy

動詞の様々な活用形のなかで ret という音連続が生じた場合、ret → ccy という音変化が生じます。

wasurete → wasuccye（忘っちえ）

okorareta → okoraccya（怒らっちゃ）

2 俺、じいちゃんさ花買ってきた。

● 亮太は仏壇に手をあわせています。

♪CD＝

亮太 : じいちゃん 死んでから 何年に なるっけか。
zuucyaN suNde=kara naNneN=ni naru=kke=ka.

ばあちゃん : 震災の 前の 年だから
suNsae=no mae=no tosu=da=kara
10 年近くに なんな。
zyuuneNcukaku=ni naN=na.

亮太 : んだ。俺 じいちゃんさ 花 買って きた。
N=da. ore zuucyaN=sa hana katte kita.
この 花びん 使って いいかい？
kono kabiN cukatte ee=kae.

ばあちゃん : ああ 使え。水だら 台所さ あっから。
aa cukae. mizu=dara daedoko=sa ak=kara.
じいちゃんとか よく 拝めよ。
zuucyaN=toko yoku ogame=yo.

♪ 音読のポイント

□で囲った k, t の音を [g], [d] と発音すると、さらに福島語らしくなります

1. 主語と目的語

標準日本語では、主語を「が」、目的語を「を」で示しますが、福島語では「が」「を」という格助詞をあまり使いません。「時計が壊れた。」「俺が座る。」のように主語だけがある自動詞文では、「が」がなくとも「時計」や「俺」が主語であることがわかります。

時計 壊っちゃ (壊れた)。俺 座る。

「俺が時計を壊した。」「俺が花を買ってきた。」のように主語と目的語がある他動詞文では、通常、人間や動物などの生物が主語、無生物が目的語です。生物か無生物かの違いで主語と目的語が区別されるので、「が」「を」は要りません。

俺 時計 壊した。俺 花 買ってきた。

生物が目的語になる場合は、目的語に「とこ」をつけて主語と区別します。「とこ」は「んところ」「のとこ」ということもあります。また、若い福島語話者は「こと」「んこと」「のこと」ということもあります。

俺 じいちゃんとか 拝む。

知子 亮太 {んところ／のこと} 叩いた。

無生物が他動詞文の主語になることは基本的にありません。「風が戸を壊した。」のような文は「風で戸壊っちゃ (壊れた)。」「と自動詞文に言い換えたほうが自然です。

なお、「を」は基本的にほとんど使いませんが、「が」を使うことはときどきあります。「が」を使う場合については、後の単元で説明します。

練習問題

- 次に示す標準日本語の文を、格助詞「が」「を」を使わない福島語の文に直なさい。これまでに学習した音変化規則なども適用すること。
 - 1) パソコンが壊れた。
 - 2) じいちゃんが軽トラを運転してきた。
 - 3) 風が吹くと、桶屋が儲かる。
 - 4) 先生が亮太をほめた。
 - 5) 晃が亮太を殴ったから、知子が晃を止めた。

期末テスト 問題用紙（50 点満点）

福島のことば、沖縄のことばは、一般には方言と見なすこともあるが、本テストでは授業で示したとおり「福島語」「沖縄語」と呼ぶ。福島語のかな表記とアルファベット表記については、授業で示した表記法にしたがうこと。沖縄語については、表記を明確に定めてはいないが、カタカナで書くこと。

問 1 次の語は福島語と標準日本語で共通して使われる語である。標準日本語に準じてかな表記した次の語を、福島語の音の仕組みを反映したアルファベット表記に直しなさい。 [1 点×3]

- (1) かじ（火事） (2) いのしし (3) ちず（地図）

問 2 次にアルファベット表記で示す福島語の語において、それぞれ [g]、[d]、[z] と発音されうる k、t、c の音があれば、その音を、**[k]**、**[t]**、**[c]** のように字の周りを囲ってマークしなさい。 [1 点×4]

- (1) 戦う tatakau (2) 光 hikari (3) かつお kacuo (4) ふたえまぶた hutaemabuta

問 3 授業で示した福島語の音変化規則にしたがって次の基底形を表層形に直し、アルファベット表記で書きなさい。 [1 点×3]

- (1) 折れると oreruto (2) 暴れて abarete (3) やめるな yameruna

問 4 次に示す標準日本語の例文を格助詞「が」「を」を使わない福島語の文に直して、漢字かなまじり表記で書きなさい。 [1 点×2]

- (1) 半沢さんがプレゼントをもらった。 (2) 弟が俺を殴った。

問 5 次の文では格助詞「に」「さ」のどちらが使われるか、授業で示した福島語の文法規則にしたがって、適切な助詞に○をつけて答えなさい。 [1 点×2]

- (1) 医者 {に／さ} 叱られる。 (2) 水くみ {に／さ} 来た。

問 6 下の説明文について、空欄に該当する最も適切な語を語群の中から選んで答えなさい。 [1 点×2]

- (1) 福島県は東北地方の各県のうち最も ① に位置する。

語群【 東 西 南 北 中央 】

- (2) 福島語では、標準日本語の「です」「ます」にあたる丁寧表現として終助詞「 ② 」が使われる。

語群【 い お っ け な び 】

問 7 次に示す福島語の文のうち「いた」の使い方が誤っているものをすべて選んで記号で答えなさい。

[2 点]

- (ア) じいちゃん、今、茶の間さいた。
- (イ) 俺、昨日の今ごろ、学校さいた。
- (ウ) 来年の夏休みは、知子、北海道さいた。
- (エ) 去年、田中さんは海外さいた。
- (オ) 明日、先生は家さいた。

問 8 次に示す福島語の文のうち、下線部の「勝った」を「勝ったった」に置き換えられるものを 1 つ選んで記号で答えなさい。

[2 点]

- (ア) 関ヶ原の戦いでは、徳川家康勝ったんだ。日本史の授業で習ったぞ。
- (イ) ワールドカップの決勝では、フランス勝ったんだ。俺、中継見てねえけど、誰かから聞いた。
- (ウ) 去年の運動会では、白組勝ったんだ。俺、白組代表で表彰状もらってきた。

問 9 次の福島語の文を標準日本語に直しなさい。

[2 点×5]

- (1) だんだん寝^ねっぺ。
- (2) こねえだ、んめえりんごもらった。
- (3) ゲームしったつけ、12 時になったた。
- (4) 今日は雨だけんちょも、練習すつつお。
- (5) 休まねかったから、くたびっちゃべ。

問 10 下の説明文について、空欄に該当する最も適当な語を語群の中から選んで答えなさい。 [1 点×2]

- (1) 琉球列島は、北の ① から南の波照間島・与那国島まで約 800 キロに及ぶ島々である。

語群【 奄美大島 伊豆大島 佐渡島 宮古島 八重山諸島 】

- (2) 沖縄の伝統的なことばをウチナーグチと呼ぶのに対し、本土のことばを ② と呼ぶ。

語群【 イサムノグチ シマグチ ニシカワグチ ニホングチ ヤマトウグチ 】

問 11 授業で示した「三母音の原則」をもとに、次の標準日本語の単語を沖縄語に直してカタカナで書きなさい。

[1 点×3]

- (1) 横 (2) 鬼 (3) 腰

裏面に続く

問 12 授業で示した標準日本語と沖縄語の対応関係をもとに、次の沖縄語の動詞、形容詞を標準日本語に直してひらがなで書きなさい。 [1 点×5]

- (1) クムン (2) ウチュン (3) ニガユン (4) ワカサン (5) クルサン

問 13 下の活用表を参考に、次に示す標準日本語の文を沖縄語の文に直してカタカナで書きなさい。なお、文中の語は基本的に「三母音の原則」によって標準日本語から沖縄語に訳せる語である。「三母音の原則」が当てはまらない語については語釈をつけたので、語釈に示したとおりに訳すこと。

[(1) (2) は 1 点、(3) は 2 点]

標準日本語		沖縄語				
活用	終止	終止	連体	否定	過去	丁寧
カ行五段活用	書く	カチュン	カチュル	カカン	カチャン	カチャビーン
サ行五段活用	干す	フスン	フスル	フサン	フチャン	フサビーン
タ行五段活用	立つ	タチュン	タチュル	タタン	タツチャン	タチャビーン
マ行五段活用	読む	ユムン	ユムル	ユマン	ユダン	ユマビーン
ラ行五段活用	取る	トゥユン	トゥユル	トゥラン	トゥタン	トゥヤビーン
ワ行五段活用	笑う	ワラユン	ワラユル	ワラワン	ワラタン	ワラヤビーン
一段活用	起きる	ウキユン	ウキユル	ウキラン	ウキタン	ウキヤビーン
形容詞	高い	タカサン	タカサル	タカコーネン	タカサタン	タカサヤビーン

- (1) タクヤが勝った。 (2) 茶碗が割れない。
(3) 白い花が咲きます。

問 14 問 13 の活用表を参考に、次に示す沖縄語の文を標準日本語の文に直して漢字かなまじりで書きなさい。なお、文中の語は基本的に「三母音の原則」によって沖縄語から標準日本語に訳せる語である。 [(1) (2) は 1 点、(3) は 2 点]

- (1) カジヌ フチャン。 (2) アリガ ジュース ヌムン。
(3) ワンガ ウヤンカイ ティガミ ウクタン。

問 15 沖縄県内のことばにも様々な地域差があるが、この授業では、そのなかでも標準語的な位置づけのことばを「沖縄語」と呼んで学習の対象とした。さて、それは沖縄県内のどの地域のことばだったか、漢字 2 字の地名で答えなさい。 [2 点]

■アンケート①：福島方言の学習に対する感想

11月29日（第10回）に小テストの1設問として実施、手書きでの回答、記名式

【設問】これまでの福島語の学習で「難しい」と思ったことにはどのようなことがあるか述べて下さい。今後の授業改善の参考になる意見に高得点を与えます。（書いてもらった内容は、学会発表や論文執筆の際に引用する場合があります。支障がある場合は、そのむね付記してください。）

【回答】（発表者が回答の内容を□で示すようにタイプ分けした）

そこまで難しくはない

- ・ここまでの講義の印象としては、そこまで難しいという感覚はなかったです。もちろん、普段ききなれず、使うことのない言葉であり、違和感や音の変化にとまどいはありました。ですが、基本的にひょうじゅん語と大きく違う点はそこまでなく、古典などよりも難しくはなかったです。

音声や表記が面倒

- ・音変化をアルファベットで表す際に、記号、大文字、小文字とまじっていて、使い分けるのが難しかった。また、普段使わない発音をだつたため口の開き方がよく分からなかった。
- ・福島語をローマ字で表記することが難しい。難しいというよりは慣れが足りないという方が正しいかも知れないが「ん」をNで表記する、「い」「え」がe、「し」「す」がsu、「ち」「つ」がcu、「ぢ」「づ」がzuで区別されないなど気を抜くとすぐに間違えてしまうようなところが難しい。
- ・鼻濁音が増えたり、小さい「っ」が沢山まざることで、福島県や東北地方独とくの方言になるのが難しい。話している内容はなんとなく理解できても、方言を書き起こしたり、文章にすると分からなくなるため、話し言葉を字づらで見るとより方言が難しく感じる。
- ・書いたときの表記と読んだときの発音が違う場合の見分けが難しかった。難しいというよりは、ややこしいというのに近いかもしれない。体感として、古典の活用を覚えているときの感覚に似ていた。
- ・た行を普段はta、ti、tu、te、toと書いているので、ca、cu、cu、ce、coという「c」に慣れるのが難しかった。母音に挟まれても「g」「d」「z」にならないというところで、1音目の無声子音、2音目の狭母音と覚えるのが多かったので慣れるまで少し難しかった。
- ・形式や規則制があっても、例外などがあつたり、時と場合によって使い方が変わるところが難しい。またその変化にも方程式のようなものがあり、全体的に覚えづらい。英語でいうスピーキングはできても、ライティングは無理みたいなことで、アルファベット表示もなかなか難しい。
- ・音の変化規則の中の「teta → tta」の変化と体験性過去「たった」があわさる形が少しややこしいと感じました。

単語が覚えられない

- ・規則のあるものは、とても覚えやすいけど、「だんだん」が「そろそろ」という意味で使われるなどの意味自体が標準日本語と共通しない単語は暗記するしかないのが難しいと思った。なるべく会話例文

の中で出してくれると、話の流れから意味も分かりやすく覚えやすくなると思った。

言語の仕組み自体が難しい

- ・母音に挟まれた k、t、c の音が g、d、z で発音される場合と、そうでない場合を見分けるパターンを覚えること。また、生物か無生物かで使われる文が変わること。
- ・ret → ccy の音変化規則が難しい。例えば、「倒れた」は「倒っちゃ」になるのが「倒れっちゃ」の方が言いやすい気がして間違いやすい。「怒られた」は「怒らっちゃ」であるので混乱しやすい。
- ・「が」「を」という格助詞をあまり使わないという説明の後で、生物目的語の「とこ」、格助詞「に」「さ」の話があったので、標準語的感覚で助詞を使っていいのか否かに混乱した。「が」「を」を使わないという話のインパクトに引き連られた様に感じる。
- ・現在を表す「いた」「てた」は少し時制が分からなくなることがあった。また同じく時制に関してですが、体験性過去の「たった」、接続助詞の「たら」「たっけ」はなじみもないので頭の中だけで考えた時は訳分からなくなりました。テレビなどで方言が出てきても言い方が珍しい単語や、語尾の「べ」「っぺ」とかをよく見る気がするので、接続助詞などなじみがないんだと思います。(テロップで出るのが特に)
- ・英文法や品詞などに似ているので、ある程度の知識がないと、とっつきにくい。色々と細かい。学術的には良いのかもしれないが、一般人がこれを見て学ぼうとは思わないと思う。
- ・音変化規則の種類が多く、また福島語で人物の所等で格助詞を省略する所がよく分かりにくく、ついたり省略したりするのが難しいと感じました。「べ」のように一つの言葉に色んな意味があって場面に応じて意味を考えるのも大変だと思いました。
- ・狭い母音、広い母音で t、k が d、g に変わる、変わらない言葉を見分けるのが難しいと思いました。また、現在形でも「いた」という所や、過去形の「いたった」は自分が体験していないと使えないと知った時、福島の人と会話すると、文の前後で現在か過去、または、自分が体験したのかを見極めなければならないのが難しいなと思いました。
- ・私が「難しい」と思ったことは、「が」や「を」を福島語ではなくして話していることです。私は「が」や「を」をつけて話すので、なくして話すということは、非常に慣れませんし、違和感を感じます。

標準日本語と似ているところもあるのが面倒

- ・標準日本語と同じ言い回しが多いぶん、細かな変化が表す意味を理解することに苦労しました。
例) でも昨日はいたったけっちょも ←「いたけれども」を示す
体験性過去「たった」と過去「た」を理解するのも難しいと感じました。かなり特殊な言い回しだと思います。
- ・基本的な語に大きな変化がされているわけではないので、それ程分かりにくいという事はありませんが、「～るべ」が「～っぺ」に変化したり、「じいちゃんところ」のような言い方は覚え辛そうです。前者は「～るだろう」から「～るべ」を経由しているのが厄介で、すぐに混乱します。「どっちだったかな？」と。後者は、標準語で「～んところ」と言うと、意味として「～の所」となってしまい、そもそも伝わりにくい他、「～さ」も同じですが、人名とそれ以外、場所とそれ以外、生物と無生物のような区分けは境目があいまいな事もあるので、多少なり苦戦しそうだなと思いました。

- ・もともと標準語にない「～つつお」や「～ちゃ」などは新しい知識として覚えやすかったが、「たっけ」や「に」と「さ」などは、違う意味で標準語として使うことがあるので判別が難しいと思った。

反復練習が必要

- ・一つの文法事項を覚えても、次の回では全て忘れてしまって代わりに新しい内容を覚える、という具合であり、言語学習として行うなら自習が必須であると感じた。復習用の、文法だけを簡単にまとめたプリントが1枚あれば良かったと思った。
- ・ret→ccy になるなど標準日本語の発音が変わる所が多くて覚えるのが難しいと感じました。なので、練習問題をもう少し増やして、数を増やす事によって音声が変わる事に対して慣れさせるのがいいと思います。後は発音の練習（発声）をもう少しやってほしかったです。
- ・全体的に難しい。丁寧表現などは全然丁寧語に聞こえないというか、やっぱり、「です」「ます」がつかないから見分けがつかない。「が」と「を」は省略するのに「は」とか「も」とかは省略しないというのも難しい。法則は理解できても、いざ、文で使ったり、標準語から訳したりするのが難しいので、もう少し練習問題をときたかった。
- ・同じ日本語のはずなのに、まるで英語の問題を解いている様な感覚になります。ooが来たときはoooになる。など規則性があるので覚えればスラスラできるのかもしれませんが、聞きなじみも、見慣れもしていないので地味に大変です。。

研究者による今後の研究が必要

- ・過去を表す「～た」が現在形でも用いられたり、「～べ」を使わなくても推量を表せたりと、明確に使い分けがなく、どちらでも表現できる場合が多くて迷ってしまう。どちらでもいいというのが、何か意味があるように考えてしまう。

■アンケート②：授業全体の感想

12月20日（第13回）に授業改善アンケート内の設問として実施、webでの回答、無記名式

【設問】この授業の良い点を具体的に記述してください

【回答】

- ・視覚資料を使って授業への興味や導入しやすさをあげていたように思った。
- ・実際に方言を口に出して読んでみるなど、学生の参加の多い点
- ・専門的な内容を生徒にも分かるように説明している点。
- ・良い意味で講義らしくなく、気楽に受けられた。朝早い1限からで眠かったが、頭の運動にもなる。
- ・レジェメの分かりやすさ
- ・映像とか見せてくれる。その土地の文化とかもわかる
- ・言語学の授業なので先生が練習問題などを出してくれる。
- ・小テストに授業で分かりづらかった所を学生に答えさせる問題を入れるなど先生の授業をもっと良くしようという考えが見えたところ。
- ・面白い

【設問】 この授業を難しく感じた点、この授業の改善に向けた具体的な提案があれば記述してください

【回答】

- ・ 分かりにくい形式などをもう少し丁寧に解説して欲しい。
- ・ 唐突に放り込まれるちょっとした応用問題

【教員からのコメント】

アンケートへの回答ありがとうございました。1 限目の授業に来てくれる学生さんは意欲の高い方が多いので、私としては「新ネタ」をおろすような実験的な内容を取り入れた授業を試みています。この授業でテーマとした方言教育・少数言語教育は、英語教育とは対極にある、でも、だからこそきわめて現代的な テーマです。多くの言語研究者が、この授業で試行したような取り組みに興味を持っています。その実践に、立正大学で先駆けて取り組めたこと、学生みなさんにおつきあいいただいたことに感謝します。

今後も内容を改善して、社会にとってプラスになるような活動に育てたいと思っています。ありがとうございました。

■アンケート③：この授業は自分にとって意義があったか

1月10日（第14回）に実施、手書きでの回答、記名式

【設問】

この授業では福島語と沖縄語の学習を試みました。研究者の間では、国内の方言や少数言語を次の世代に継承することは社会的に意義があるといわれています。しかし、それは研究者の勘違いや傲慢かもしれない。よかったら、この授業を通じて、福島語や沖縄語の学習をしたことは、あなたにとって個人的に意義があったか、教えてください。もし意義があったとすれば、どのような意義があったか書いてください。もし意義がなかったとすれば、福島語や沖縄語の学習に費やした時間やエネルギーを、他のどんなことに費やせばよかったか書いてください。

あくまで個人の意見なので、どのようなことを書いても成績評価には反映しませんし、白紙でもかまいません。率直な感想を聞かせてください。（書いてもらった内容は、学会発表や論文執筆の際に引用する場合があります。支障がある場合は、そのむね付記してください。）

【回答】

- 講義内容は十分に面白かったのですが、意義があったと言われると、そんなになかったですね。やはり英語みたいに使えるという訳ではないので。ただ講義は面白かったです。来年もまた白岩先生の講義を受けたいです。
- 日文科で方言学習に触れることができたのはとても貴重な時間でした。ありがとうございました。
- 関東の近くである東北の方言を学ぶことで自分たちの今の言葉がどのように作られているかということが学べられ、自分の発っている言葉により意識するようになったので言葉を重じるようになるという意義はあったと思いました。
- 意義があった。役立つとかはわからないが、単純に楽しかった。同じ日本なのに全然ちがう言葉のようを感じるし、福島、沖縄だけでなく、もっと方々の方言も勉強したい。（関西の方とか九州の方とか）
- 方言を学習したことは私にとって意義がありました。福島語や沖縄語は普段使うことがなく、新しい言語として学んだので、標準言語を見直すきっかけになりました。いつも使っている言葉が当たり前だと思っていましたが、方言でも使いやすいものや、文法的に伝えやすいものなど、方言の方が言葉として相手に伝わりやすいものもあるのだと感じました。方言を学ぶことによって視野が広がり、多様な文化を知ることができるので、これからの国際社会を生きていくための、多様性を認める力もつくと思いました。そういった意味で、意義があると思います。
- （テニスの王子様というマンガに登場する木手くん）私の好きな人が沖縄語を話すので、彼の話を理解しやすくなったり、彼がこういうときにはどう言うのか、という想像をしやすくなったりして役に立った。
- 元々、世間一般で言う「役に立つもの」という評価基準に疑問を持っており、社会的な意義は特に意識していなかった。「役に立たない」ものこそが高級であろうから、世間一般の「役に立たない」を無視して、「役に立たない」ことに胸を張りたい、といったようなことを感じている。
- 例えどれだけ勉強しても、エセ方言というものはイラつかれるものなのではないでしょうか？創作などに使用する場合も、どう思われているのか多少気にしてしまいます。
- この講義を通して、方言について学べたことで得たのは国内旅行をした際に現地の方々と交流するに

あたって、話を盛り上げる事ができるスキルです。(現地以外の人を使う、知っているのは珍しいので)

- 純粹におもしろくて、日本の知らない文化が学べて良かった。個人的興味を満たせたので満足
- 地域によって少しずつ方言が違い法則もあること、それを残そうと努力している人達がいることに感銘を受けた。辺野古問題で気になっていた沖縄県知事のツイッターのことなどが理解でき少し親近感が湧いた。
- 方言で卒業論文を書く予定なので、とても参考になりました。
- 日本人として、日本の方言を知ることは大切な事だと思った。なので、学ぶ意義は十分にあると思った。
- 福島語、沖縄語をはじめとする国内の少数言語が標準日本語の土台となっていることが分かった。確かに方言はマイナーで学んでどう役立つのか分からない。けれども昔からの言語が今にもしっかりと息づいていることを知り、また標準語との関わりを知り、方言がなければ今の日本の標準語はなかったのではないかと思った。
- 先生が言っていた方言がなくなると日本語もなくなるのではないか、という所から自分が継承できるか分かりませんが意味はあったと思います。また福島語や琉球語(ウチナーグチ、ウチナーヤマトグチ)を使っている人と話せるかもしれない、そこから仲良くなれるかもしれないという可能性もあるので、私にとっても方言にとっても無駄なことはなく、意義のある時間だったと思います。(意味が伝わりづらかったらすみません)
- 言語が統一化されていく中で、少数の人達の使う沖縄語や福島語は、継承するとして、何人のどれだけの人が、受け継げば残っていくのか等、考えると、社会的に意義があるかどうかは自分はわからなかった。だが、個人的には、外国語のような日本語を読み解く事はおもしろく、お笑い芸人の「千鳥」の2人のように沖縄語や福島語を武器に闘う人が現れれば継承も長く続いて行くのかなと考えた。
- 言語を通じて文化などを学び、福島の人や沖縄の人への理解を深める事が出来たと思います。
- 元々方言に興味はありましたが、福島や沖縄の言語について学ぶ機会はなかったもので、楽しかったです。映像などの資料も見せて頂けるので、例があげられると、把握できる度合が違いますね。
- 私自身、方言に物凄く興味があるので、すごく有意義な時間でしたし、方言は日本の良き文化ですから、決して意義のないものではないと思います。私の出身は奄美ですが、沖縄語とは全く違うので楽しいし、福島語はもっと新鮮で楽しかったです。方言研究は決して無駄ではありませんし、今後も幅広く継承されていくべきだと思います。